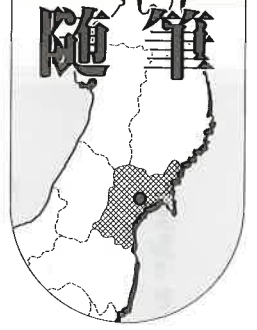


## 随筆



# 武道・禅・ターミナルケア

東北大学大学院・宗教学研究室  
岡部医院

大村 哲夫



縁あって終末期癌患者の在宅看取りを専門とする医院に関わることになった。ここでの私の仕事は、患者・家族そして医療・介護スタッフの心理臨牀的な援助を行うことであるが、同時に「チャプレン（病院付き聖職者）」的な役割も期待されている。

この病院は、院長の「患者さんがご自宅で最期までキチンとした生活が送れるようにしてお見送りする」という方針で運営され、自然現象としての死を看取っていくことを大切にしている。いうまでもないことだが、人は誰でも死ぬ。しかし、その死をどう迎えるかという

修行道場を出る筆者

ことは、どう生きるかということの総決算であり、決

しておろそかにすることはできない。

さて私は、今までいくつかの武道を経験し、曲折のある中で三十年ほども続けてきたのだが、その魅力は何であったか、と振り返ると、二つのことに気が付く。

一つは良師との出会いという「師の恩」であり、もう一つは攻守のせめぎ合いの中で感じる「一瞬一瞬の充実感」である。拳や脚頭が飛び棒や杖がうなりを上げる時、一切の理屈は通用しない。相手の攻撃に合わせて自分の身体が自然に反応する、試合の勝ち負け以上に至福の充実感を味わえたのは、まさにそういう丁々発止の瞬間であった。

六年前、私は禅の修行を体験したいと剃髪して僧堂の門を潜ったが、禅僧の雲水生活は文字通り四六時中が修行であった。坐禅はもとより、食事、作務とよばれる労働、洗面、用便にいたるまですべてに仏法があるということ、僧堂生活を通じて徹底的に身体で学ぶことができた。仏法とは何か特別のことがあるのではなく、当たり前の日常の中に真実がある。それを大切に

生きること、それが自然にできるようになることが修行であり、仏道そのものであるといえよう。ユダヤ・キリスト教文化の中でも「神は細部に宿る」というが、些末なこともおろそかにせずその中に真実を見出すということは、東西宗教共通であるといえるかもしれない。

武道を通して学んだ日々の基本稽古の大切さと、禅の教える日常を当たり前に行ずることとは相通することだが、継続して実行するにはこれほど難しいことはない。

死をまさに迎えようとする患者に向き合うことも、自分自身の生が問われる真剣勝負であるが、死が必然である以上、食べたり眠ったりすることと同じく日常の延長線上にある。患者だけが死ぬのではなく、自分自身も遅かれ早かれ死を迎えるのだ。

現代人のほとんどが病院で死を迎えている。死というものが日常から遠ざけられて実感の伴わない現代ほど、生きることが軽んじられている時代はない。武道を通じて、宗教を通して、あらゆる日常生活を通して、刻々と死に向かつて歩いている私たち自身を自覚しつつ、刹那刹那を誠実に生きてゆくこと以外に私たちの人生はないのではないか。自分がやがて死すべき運命にある、という厳しい現実を知っている生物は人間だけである。それだけに人生は愛おしく、人と人との出会いの不思議さと感動があるのだろう。